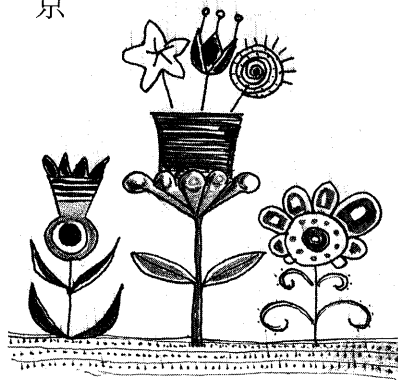


附属幼稚園の教育(12) 最終回

卒業・進級の時期に

当たって思うこと

村石 京



いよいよ三月、この年度の一年のしめくくりの時を迎えようとしています。

卒業、進級の時期を目前にして、残り少なくなった日々を指折り数えては、残りの日々を大切にしたい、子どもたちをいとおしみたいという思いが胸に一杯になります。殊に卒業の学年の級の担任は、一人ひとりのアルバムに写真をはったり

しながら、二年前、あるいは三年前にはじめて出会ったあの当時の幼かった面影を思い出し、現在の姿とだぶらせながら大きく立派に成長したその歩みを自分のことのように嬉しく、誇らしく思って胸を熱くしたりする日々でもあります。そして一方では、あの時にはもっとああもすればよかった、あの子にはこうしてあげればよかったと

いう反省で、自分の至らなさを自責し、子どもへの申しわけなさに謝りたいような複雑な思いが胸の中に去来する日々でもあります。そして幼稚園生活最後の時期を、今まで以上に充分に楽しみ、心ゆく迄ゆったりと遊ばせてあげたいと思うのに、何故か日が経つのが早くて足元から鳥が飛び立つようにあわただしく卒業の日を迎えるような感じがするのは、一人私だけの思いなのか。

このような複雑な気持ちを持ちながら、卒業までの日々を惜しみつつ保育をしています。その中でも子どものかかわりをより一層深めたい、そしてお互いの中にお互いの出会いと、その出会いの中に刻まれたつながりを、より一層大切にしていきたいという思いを強くもっております。そして幼稚園生活の中の楽しかった日々の思い出とともに、人とかかわりによって生まれ、育てら

れたよい人間関係もこれから先へつなげてほしいと願いながら、子どもとともに過ごす日々でもあります。

一方、どの学年においても、級としての集団の成長をふり返ってみると、あの四月のはじまった当初の個々ばらばらの状況を思い出して、現在級としてのまとまりや、子どもの中に芽生えている級の意識や誇りを嬉しく思ったりもいたします。また、更に大切なことは、個々の子どもの成長を見つめ、見直していくことにあることはいうまでもありません。一人ひとりの子どもについては、その子どもがよく伸びた面を認めていくとともに、個々の子どもの持っている面白い個性を大切に、その子どもの独自のものを損なうことなく伸ばしていくことに、保育者として努力し、力をかすことが出来たかなどもふり返っていきたいと思います。

その中には勿論、まだ子どもによっては充分伸びていないところや、身につけていないこともあるかもしれませんが。それは残り少ない日々の中にもあせらずに、着実に、保育者も子どもともに努力していきたいと思えます。しかし大切なことは、級全体の中の一人として、この子はまだこの

面が伸びていないとか、あるいは身につけていない等と見るのではなく、その子どもの中でよく伸びた面を認め、伸びなやんでいるところに手をそえていくようにあります。平成二年度より、指導要録の記入方法も変わり、級全体の中における子どもを評価するのではなく、その子どもをよく伸びた面を特徴として記入するようになりました。これは正に、保育者の子どもを見る眼がそのようにあることが大切なことなのだと思います。子どもの発達は一人ひとり違うわけですから、その子その子の個を大切に、子どもの一

年間、あるいは二年間、三年間の歩みを見つめ、その成長を認め、その努力を認めるようにしたいと思えます。

そして今、幼稚園では、子どもたちは進級あるいは卒業という一つのエポックとなる時期に当たっているわけですが、人間としてのトータルなものとしてその成長を見るならば、そこに何か区切りや飛躍があるわけではなく、たゆまない歩みによって道すがらつくられていくことになるのです。そうした考えに立って、教師自身も子どもの成長をじっくりと見つめる気持ちを持ちたいものです。幼稚園卒業迄にはここまで出来なくてはと、あるいは年長組になる迄にこの辺までやれるようにといった到達度を、教師の側で設定していくような捉え方はしないようにありたいと考えています。到達度を決めてしまうとどうしても子どもを見る眼が、この子はまだそこ迄至っていない

いところがあるといった見方になりがちになりま
す。そしてその子どもの持つ個性や良さに目がい
かなくなり、全体の中の一人という見方になって
しまいます。三月は幼稚園として一つの区切りの
時期に当たっていますが、子どもの成長を見ると
きは、もっと長いスパンで捉えていくことが大切
であると考えます。殊に附属学校のように、連絡
進学が行われているところではそれも可能であ
り、子どもの今後の成長を追跡調査、研究した
り、上級校の教師との話し合いの場を持つことな
ども必要であると考えています。そして卒業の時
期を前にしては、以前の青く小さな芽であったも
のが、ふっくらと色づいて優しい蕾にふくらんで
きた現在を喜び、これからの人生の中で美しく大
きく花開くときを迎える日を願って送り出したい
と考えています。

とにかくこの時期に教師として見直していき

い大切なことは、子ども一人ひとりが充分満足し
た幼稚園生活を送ることが出来たかどうかという
ことと、私も教師は個々の子どもの多様なニー
ズに的確に、そして誠実に応えることを充分して
きたかどうかをよく振り返り、その反省を自分自
身のものとして次年度へつなげていきたいという
ことです。また、子どもの心は一人ひとり異なっ
ていますが、そのどの子どもとも、人とかかわ
りの中で信頼のきずなをつくる事が出来たかど
うか、それは子どもと教師の間で、あるいは子ど
も同士の中で、よい人間関係として育て、培って
いくことが出来たかどうかを充分見ていくように
したいと思います。そして人としての優しさを、
子どもの中に育てることに手をかすことが出来た
か、教師自らも人に優しく接することが出来た
か、あるいは子どもや母親とのかかわりの中で、
相手の良さを知り、それを得て自分自身も成長す

ることが出来たかなどもふり返ってみたいと思います。そして更に残された日々の中では、人間関係の面で一層の強いきずなをつくることへの誠意をつくし、出来るだけの優しい心で子どもと接するようにしていきたいと思っています。

教師としては、卒業、進級の時期には、子どもの成長に対する喜びも大きいながら、一方では自分の手から巣立っていく子どもを前にして別れの淋しさを思い、また、充分なことの出来なかつたことへの力量の不足をまざまざと自覚する複雑な気持ちの錯綜する時期であります。

子どもの人となりは夫々異なり、未来に向かって輝いていますが、やはり保育者の影響を受ける

ことも大きくあります。年度の終わりに当たっては、子どもの成長の歩みをふり返るとともに、教師本人が、自分自身として本年度の反省を充分した上で次へのステップとし、教師としての研鑽と、人間としての向上をはかる努力をしていくことが大切なのではないでしょうか。いろいろ思うことはたくさんあるのに、なかなか言葉としては書きつくせないものがあります。「教えるとは希望を語ることであり、学ぶとは誠実を胸に刻むことである」『教育入門』堀尾輝久著（岩波新書）の中にある言葉をもって結びとさせていただきます。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）